

2017年版 デュプリケートブリッジの規則

プレイされたカードに関する注釈

ver 1.03 2018/11/14

仲村篤志

－ 索引 －

第41条	プレイの開始	2
第42条	ダミーの権利	8
第43条	ダミーが受ける制限	10
第44条	プレイの順序と進行	14
第45条	プレイされたカード	16
第46条	ダミーのカードの不完全または無効な指定	26
第47条	カードのプレイの取り消し	28
第48条	ディクレアラーが見せたカード	32
第49条	ディフェンダーが見せたカード	32
第65条	トリックの並べ方	34
第66条	トリックの検査	36
第67条	過不足のあるトリック	38
実際の裁定例		42

規則の目的

規則はデュプリケートブリッジの正しい手順を定め、それからの逸脱による損害に対して、相当の補償をすることを目的としている。

また、規則は違反行為を処罰することではなく、違反行為によって非反則者が損害を被った状況を調整することを目的としている。

(デュプリケートブリッジの規則 前書きより)

第41条 プレイの開始

A. オープニングリードを伏せて出す

ビッド、ダブルまたはリダブルの後にパスが順番に3回続いた後、ディクレアラー予定者のLHOがオープニングリードを伏せて^{*9}出す。伏せて出したリードは違反行為の後ディレクターの指示がある場合に限り取り消すことができる（第47条E項および第54条参照）。取り消したカードはディフェンダーのハンドに戻さなければならない。

B. オークションの復唱と質問

オープニングリードを表向きにする前に、リードしたプレイヤーのパートナーとディクレアラー予定者は（ダミー予定者は除く）オークションの復唱や相手方のコールの説明を要求できる（第20条F項2および第20条F項3参照）。ディクレアラー^{*10}とディフェンダーは最初にカードをプレイする順番のときオークションの復唱を求めることができる。この権利はカードをプレイするとなくなる。ディフェンダー（第16条を適用することがある）とディクレアラーにはプレイ期間中終始、自分^{*11}がプレイする順番のとき説明を求める権利を保持する。
(続く)

^{*9} 管轄団体はオープニングリードを表向きに出すよう指示できる。

^{*10} 順番外のオープニングリードを受け入れた場合を除き、ディクレアラーの最初のプレイの順番はダミーからである。

^{*11} ディクレアラーはダミーあるいは自分のハンドからプレイする順番のときに質問できる。

- L41A
- 脚注9、JCBLはHANDBOOKにある管轄団体規定でオープニングリードを伏せて出すよう定めている。
 - 第47条E項『間違った情報に基づくプレイの変更』
 - 第54条『表向きに出した順番外のオープニングリード』
 - 伏せて出されたオープニングリードはプレイされたカードではない。

(WBF Laws Committee 1989/7/9)

- 伏せて出されたオープニングリードは、ディレクターが指示しないかぎり取り消してはならない。ディレクターは説明の間違いや、順番外など違反行為がない限り取り消しを指示してはならない。
 - リードが表向きになるまでオークション期間は終了していない。それまでに説明の訂正があれば、第21条『間違った情報』よりディレクターはパスの1つもしくは2つを取り消してオークション中に戻すことができる。
- L41B
- 第20条F項『コールの説明』
 - 最後のパスの後で「コールの説明」ができるタイミングは説明期間と自分の順番である。自分の順番とはカードをプレイする直前である。
 - ダミー（予定者）は、プレイが終了するまでコールの説明を求めることができない。
 - 第40条B項2(c)よりJCBLは対戦相手のコンベンションカードを参照することはどのタイミングでもできるよう定めている。ただし不当な情報の対象になる。
 - 正しい期間にディフェンダーがコールの説明を求めることは正当な手続きだが、どのような質問であれ第16条『正当な情報と不当な情報』が適用される。

(続く)

第41条 プレイの開始（続き、B項再掲）

B. オークションの復唱と質問

オープニングリードを表向きにする前に、リードしたプレイヤーのパートナーとディクレアラー予定者は（ダミー予定者は除く）オークションの復唱や相手方のコールの説明を要求できる（第20条F項2および第20条F項3参照）。ディクレアラー^{*10}とディフェンダーは最初にカードをプレイする順番のときオークションの復唱を求めることができる。この権利はカードをプレイするとなくなる。ディフェンダー（第16条を適用することがある）とディクレアラーにはプレイ期間中終始、自分^{*11}がプレイする順番のとき説明を求める権利を保持する。

C. オープニングリードの表向け

説明期間【日本語版注：第17条D項1参照】の後、オープニングリードを表向きにしてプレイ期間が確定的に（【日本語版注】オークション期間に戻ることはない）始まり、ダミーのハンドを広げる（表向きの順番外のオープニングリードは第54条A項参照）。前に行われたコールの復唱を要求する（本条B項参照）には遅過ぎるときでも、ディクレアラーとディフェンダーは自分^{*11}がプレイする順番のとき、コントラクトおよびダブルやリダブルがかけられているかを知る権利があるが、誰がダブルやリダブルをかけたかを聞くことはできない。
（続く）

説明期間【日本語版注：第22条B項1参照】は誤植

^{*10} 順番外のオープニングリードを受け入れた場合を除き、ディクレアラーの最初のプレイの順番はダミーからである。

^{*11} ディクレアラーはダミーあるいは自分のハンドからプレイする順番のときに質問できる。

L41B

（続き）

- ディフェンダーは最後のパスのとき、手順上はコールの説明を求めることができるが、リードを受ける側のときは、自分のコールに影響がない限り説明を求めるべきではない。リードが伏せて出されてから質問すべきである。プレイヤーは自分の質問がパートナーのリードに影響を与える可能性を考慮すべきである。
- 第16条『正当な情報と不当な情報』はリードだけでなくその後のプレイにも適用される。

L41C

- 第17条D項1は「説明期間」の説明
- 第54条A項『ディクレアラーがハンドを広げる場合』
- リードが表向きになるとオークション期間が終了し、プレイ期間が始まる。説明の間違いがあってもオークションには戻れない。
- 最後のパスの後で「オークションの復唱」ができるタイミングは下記のとおり
オープニングリーダー：リードを伏せて出す前
ディクレアラー：リードが伏せて出されているときか、ダミーからカードを引くとき
もう一方のディフェンダー：リードが伏せて出されているときか、最初の自分の順番
ダミー：プレイが終了してから
- ディクレアラーはダミーのカードを指定すると復唱を求める権利がなくなる。
- コールの説明とコントラクトの確認、ダブル・リダブルの有無の確認は、自分の順番であればいつでも行うことができる。
- 「オークションの復唱」を求める権利があったとしても、誰がダブルをかけたかを質問するのは不適切である。第20条B項よりオークション全体の復唱を求めなければならない。
（続く）

第41条 プレイの開始（続き）**D. ダミーのハンド**

オープニングリードが表向きにされた後、ダミーは自分のハンドをテーブルの上に表向きにスート毎に揃え、一番低いランクのカードをディクレアラーに向けてランク順に並べてディクレアラーに長い方を向けて別々の縦列に広げる。トランプはダミーから見て右側に置く。ディクレアラーは自分とダミーの両方のハンドをプレイする。

- L41D
- ダミーのハンドを並べるとき、少し斜めに傾けてスートの枚数がわかりやすくなるようにするのは「長い方を向けて別々の縦列に広げる」の範疇である。
 - ダミーが13枚のカードを見えるように揃えて並べないことは手順違反である。ディレクターは見えないカードがディフェンスに影響を与えたと判断したならスコアを調整する。ディフェンダーにはダミーのカードが13枚であることを確認する義務はない。

第42条 ダミーの権利**A. 無条件に行使できる権利**

1. ディレクターの立会いのもとに事実や規則について情報を与えること。
2. トリックの勝ち負けを数えること。
3. ディクレアララーの代理として指示されたとおりにダミーのカードをプレイし、また正しくスートにフォローするように務めること（ダミーがプレイを示唆した場合は、第45条F項参照）。

B. 条件付きの権利

ダミーは第43条に記載された制限内で、次の各種権利を行使できる。

1. スートにフォローしなかったディクレアララーに、リードされたスートのカードがないかを聞くこと（ただし、ディフェンダーに聞くことはできない）。
2. 違反行為を防ぐよう努めること。
3. 違反行為を指摘すること。ただし、ハンドのプレイが完了した後に限られる。

- L42A1 ○第45条F項『ダミーがカードを指示した場合』
○ダミーはディレクター立ち会いのもとに情報を与える権利しかない。ダミーは勝手に質問してはならない。
○裁定にあたって、必要以上に関与してくるダミーを制止することはディレクターにとって最初の仕事である。制止を繰り返し聞かないようなら、第90条『手順上のペナルティ』を検討する。
- L42A2 ○トリック数を数えることで、今何トリック勝っているかなどの情報をディクレアララーに示唆してはならない。
- L42A3 ○ディクレアララーの指示がリボークになるときは従わない。第43条『ダミーが受ける制限』で制限を受けていたとしても、リボークの指示には従わない。
- L42B ○第43条『ダミーが受ける制限』は他のプレイヤのカードを見るなどの違反行為をしていないダミーだけに本条B項の権利がある。
○権利のないダミーが本条B項の権利を行使してしまったときは第43条B項を参照する。第43条にて解説する。
- L42B1 ○ダミーはディフェンダーにリボークの確認をしてはいけない。プレイ終了後に申告する。
- L42B2 ○ディクレアララーが順番外にプレイしようとするのを止めるのは「違反行為を防ぐよう努める」ことである。ただし常にリード権がある方を指示する（ダミーにリード権があるときは常に手を上げるなど）のはプレイの示唆に当たる。
○2017年規則より「違反行為の防止」はディフェンダーに対しても行えるようになった。例えばオーバーラフに気が付かなかったディフェンダーが次のトリックにリードしようとしたときに注意することができる。

第43条 ダミーが受ける制限

第42条で認められている場合を除き、ダミーは以下の制限を受ける。

A. ダミーが受ける制限

1. (a) ダミーは、他のプレイヤーが違反行為を指摘した場合を除き、プレイ中率先してディレクターを呼んではならない。
- (b) ダミーは、プレイ中違反行為を指摘してはならない。
- (c) ダミーは、プレイに決して参加してはならず、またディクレアラーにプレイについて一切情報を伝えてはならない。
2. (a) ダミーは、ディクレアラーとハンドを交換してはならない。
- (b) ダミーは、ディクレアラーのプレイを観察する目的で席を離れてはならない。
- (c) ダミーは、ディフェンダーのハンドを見てはならない。
3. ディフェンダーは、ダミーにハンドを見せてはならない。

B. 違反が起きた場合

1. 本条A項1やA項2に列記した制限に違反した場合、第90条に定めたペナルティを科すことがある。
2. 本条A項2に列記した制限に違反した後、ダミーが、
 - (a) ディクレアラーに間違ったハンドからリードしないよう注意した場合、どちらのディフェンダーもディクレアラーがどちらのハンドからリードするかを選ぶことができる。
 - (b) ディクレアラーのハンドからのプレイがリボークにならないかをダミーが最初に質問した場合、ディクレアラーはそのプレイが違法なものならば正しいカードに入れ換え、リボークが成立したものととして第64条の規定を適用する。
3. 本条A項2に列記された制限に違反した後、ダミーがディフェンダーの違反行為を最初に指摘した場合は、その場で調整はしない。プレイは違反行為がなかったものとして継続する。ディフェンダー側が違反行為により利益を得たときは、プレイ終了後にディレクターはその利益を取り去った調整スコアを与える。ディクレアラー側はテーブルでの結果によるスコアを得る。

- L43A1 ○ダミーは率先してディレクターを呼んではならない。第42条B項3より違反行為を指摘できるのはプレイ終了後であり、さらに制限付きの権利である。
- 声の小さいプレイヤーに代わってディレクターを呼ぶのは問題ない。
- L43A3 ○ダミーの制限ではないが、ディフェンダーもハンドを見せなくてはならない。
- L43B1 ○本条A項の「ならない」に留意する。規則前文より第90条『手順上のペナルティ』が科されることが多い違反である。
- L43B2 (b) ○リボークが成立したものととして扱うケースは以下のときである。
- (1) ダミーがディクレアラーのハンドを見る目的で席を離れたり、実際にディクレアラーやディフェンダーのハンドを見て、
 - (2) さらにディクレアラーがリボークしていないかどうかの質問を最初にして、
 - (3) 実際にリボークしていたとき
- リボークが成立したものととして扱うとき、まずリボークしたカードは取り消し、スートフォローできるカードに直す。ディクレアラーなので取り消したカードはハンドに戻す。そしてリボークが成立したものととしてトリックを調整する。もしリボークが成立したときの調整が2トリックならば、リボークは訂正したうえで2トリックを調整する。

(WBF Laws Committee 2000/1/12)

第43条 ダミーが受ける制限（再掲）

第42条で認められている場合を除き、ダミーは以下の制限を受ける。

A. ダミーが受ける制限

1. (a) ダミーは、他のプレイヤーが違反行為を指摘した場合を除き、プレイ中率先してディレクターを呼んではならない。
- (b) ダミーは、プレイ中違反行為を指摘してはならない。
- (c) ダミーは、プレイに決して参加してはならず、またディクレアララーにプレイについて一切情報を伝えてはならない。
2. (a) ダミーは、ディクレアララーとハンドを交換してはならない。
- (b) ダミーは、ディクレアララーのプレイを観察する目的で席を離れてはならない。
- (c) ダミーは、ディフェンダーのハンドを見てはならない。
3. ディフェンダーは、ダミーにハンドを見せてはならない。

B. 違反が起きた場合

1. 本条A項1やA項2に列記した制限に違反した場合、第90条に定めたペナルティを科すことがある。
2. 本条A項2に列記した制限に違反した後、ダミーが、
 - (a) ディクレアララーに間違ったハンドからリードしないよう注意した場合、どちらのディフェンダーもディクレアララーがどちらのハンドからリードするかを選ぶことができる。
 - (b) ディクレアララーのハンドからのプレイがリボークにならないかをダミーが最初に質問した場合、ディクレアララーはそのプレイが違法なものならば正しいカードに入れ換え、リボークが成立したものとして第64条の規定を適用する。
3. 本条A項2に列記された制限に違反した後、ダミーがディフェンダーの違反行為を最初に指摘した場合は、その場で調整はしない。プレイは違反行為がなかったものとして継続する。ディフェンダー側が違反行為により利益を得たときは、プレイ終了後にディレクターはその利益を取り去った調整スコアを与える。ディクレアララー側はテーブルでの結果によるスコアを得る。

- L43B3 ○本条A項2に違反したダミーがディフェンダーのリボークの可能性について指摘し、実際にリボークしていたときは、リボークを訂正するがそれ以上の調整はない。「調整はない」ので取り消したカードはペナルティカードにはならずハンドに戻す。

ディクレアララー側はテーブル上のスコアが結果になる。ただしリボークしたディフェンダーも反則者側である。第12条B項1「反則側が反則行為から得た利益すべてを取り去る」ため、リボークの調整込みの結果が、テーブルの結果より悪いときは、ディフェンダー側のみスコアを調整する。結果はスプリットスコアになる。

(WBFLC minutes 2008-10-10)

- L43A1(b) ○本条A項2に違反していないダミーがディフェンダーのリボークの可能性について指摘したときについて考察する。

ディクレアララー側：ダミーがディフェンダーのリボークの可能性を指摘するという違反行為をした。

ディフェンダー側：リボークをした(成立はしていない)。従って、双方の側が反則者側である。

本条B項3は適用されないため通常の規則で裁定する。第62条『リボークの訂正』よりリボークは訂正しなければならない。ディフェンダーの取り消したカードはメジャーペナルティカードになる。双方が反則者のためリボークの後にプレイされたカードは訂正できない。テーブル上のスコアがディフェンダー側のスコアになる。

ごく稀にメジャーペナルティカードの被害があまりに大きくリボークが成立していた方が被害が少ないことがあるかもしれない。第12条B項1「反則側が反則行為から得た利益すべてを取り去る」ため、そのときはディクレアララー側のスコアをリボークの調整込みで想定できる結果に調整する。結果はスプリットスコアになる。

第44条 プレイの順序と進行**A. トリックへのリード**

（自分の側が犯した違反行為のため制限を受けていなければ）トリックにリードするプレイヤーはハンドにある任意のカードをプレイできる。

B. トリックへのその後のプレイ

リードの後、順番に当たっている残りのプレイヤーがカードをプレイし、このようにプレイされた4枚のカードがトリックを構成する（カードをプレイする方法とトリックの並べ方についてはそれぞれ第45条および第65条参照）。

C. スートにフォローする義務

トリックに対してプレイするときは各プレイヤーは可能ならスートにフォローしなければならない。この義務は規則のどの義務よりも優先する。

D. スートにフォローできない場合

（自分達の側が犯した違反行為のため制限を受けていなければ）スートにフォローできない場合、プレイヤーは任意のカードをプレイできる。

E. トランプを含むトリック

トランプを含むトリックは、一番高いトランプを出したプレイヤーの勝ちとなる。

F. トランプを含まないトリック

トランプを含まないトリックは、リードされたスートの一番高いカードを出したプレイヤーの勝ちとなる。

G. 第2トリック以降のトリックへのリード

次のトリックへのリードは最後のトリックを勝ったハンドから行う。

L44B ○第45条『プレイされたカード』

○第65条『トリックの並べ方』

L44C ○スートにフォローしないとブリッジというゲームが成り立たない。どの条項のどの義務より優先さる。リボークが要求されるプレイはありえない。従ってメジャーペナルティカードよりも「スートにフォローする義務」が優先される。
○カードがプレイされた後は第62条『リボークの訂正』と第63条『リボークの成立』に従う。

第45条 プレイされたカード**A. ハンドからのカードのプレイ**

ダミーを除くプレイヤーは、自分のハンドからカードを1枚取り出し、テーブルの上の自分のすぐ前に表向き^{*12}にプレイする。

B. ダミーからのカードのプレイ

ディクレアラーはカードを名指し、その後ダミーはそのカードを取り上げてテーブルの上に表向きにしてダミーのカードをプレイする。ダミーのハンドのプレイの際、ディクレアラーは必要なら自分で希望するカードを取り上げてよい。

C. プレイしたとみなされるカード

1. パートナーに表が見えるように持っていたディフェンダーのカードは現行のトリックにプレイしたとみなされる（そのディフェンダーが既に現行のトリックに対して合法的にカードをプレイしていた場合は第45条E項参照）。
2. 次の場合、ディクレアラーはハンドからカードをプレイしたとみなす。
 - (a) 表向きに、テーブルに触れるか触れそうな状態で持たれているか、
 - (b) プレイしたことを示唆するような位置に保持されている。
3. ダミーのカードを揃える目的の場合、および、プレイするカードに手を伸ばす目的でその上下のカードに触れる場合を除き、ディクレアラーが故意に触れたダミーのカードはプレイされる。

（続く）

- L45 ○どの状態のカードがプレイされたカードとしてみなされるかを判定するには、ディレクターの技術的な能力が必要である。そのため第45条『プレイされたカード』は極めて重要な条項である。
- L45A ○脚注12、JCBLはHANDBOOKにある管轄団体規定でオープニングリードを伏せて出すよう定めている。
- L45C ○プレイされたとみなされるカードは下記のとおり
- ディフェンダー：**
- (1) パートナーに表が見えるように持っていたカード
 - (2) 名指しした自分のハンドのカード
- ディクレアラー、ハンドからのプレイ：**
- (1) 表向きにテーブルに置かれていたとき
 - (2) プレイしたと思われる位置で持たれていたとき
 - (3) 名指しした自分のハンドのカード
- ディクレアラー、ダミーからのプレイ：**
- (1) カードを名指ししたとき
 - (2) プレイする目的でダミーのカードに触れたとき
- L45C1 ○本条E項『トリックにプレイされた5枚目のカード』
- ディフェンダーが手に持っていて、表がパートナーに見えるような位置に持たれていたならば、それは「プレイしたとみなされるカード」になる。実際にプレイする意図があったかどうかは考慮されない。
- 「持っていた」とあるので落としたり、プレイしたカードにくっついて出たカードは「プレイされたとみなされない」。第50条『ペナルティカードの処置』を適用する

^{*12} 管轄団体が別途の指示をしなければ、オープニングリードは、伏せて出す。

第45条 プレイされたカード（続き）

C. プレイしたとみなされるカード

2. 次の場合、ディクレアラーはハンドからカードをプレイしたとみなす。
 - (a) 表向きに、テーブルに触れるか触れそうな状態で持たれているか、
 - (b) プレイしたことを示唆するような位置に保持されている。
3. ダミーのカードを揃える目的の場合、および、プレイするカードに手を伸ばす目的でその上下のカードに触れる場合を除き、ディクレアラーが故意に触れたダミーのカードはプレイされる。
4. (a) プレイヤが名指したり、プレイするつもりで指定したカードはプレイされる（ただし、第47条参照）。
 - (b) ディクレアラーは自分のハンドまたはダミーから次のカードをプレイするまでは、意図と異なるダミーからのカードの指定を直すことができる。指定の変更において、口が滑ったことによるものは認めることができるが、集中力が途切れたり行動を考え直したことによるものは認められない。指定を変更する前に対戦相手が順番通り合法的にカードをプレイしていた場合は、この対戦相手はこのプレイしたカードをハンドに戻し、別のカードを代わりにプレイすることができる（第47条D項および第16条C項1参照）。
5. メジャーかマイナーかに関わりなく、ペナルティカードはプレイしなければならないことがある（第50条参照）。

（続く）

L45 （続き）

- L45C2(a) ○ 「held face up」が原文の表記である。したがって表向きに持たれていることが条件になる。テーブルにカードの裏が一瞬ついたかもしれないが、慌てて戻したカードは「プレイされた」とみなされない。ディクレアラーなので調整なしでハンドに戻すことができる。
- L45C3 ○ ディクレアラーがプレイする目的でダミーのカードに触れると「プレイされたカードとみなされる」。実際にはカードを揃える目的かもしれないので、ディフェンダーは早まってプレイしないようにすべきである。
- L45C4(a) ○ プレイする意図でカードを名指しすると、名指しした時点でカードは「プレイされた」とみなされる。
- カードの名指しはダミーに対して以外に、自分のハンドに対して行われる可能性がある。ディフェンダーでもそれは同様である。そして自分のハンドに対する名指しは取り消すことができない。
- ただし第47条『カードのプレイの取り消し』では反則行為の後など、取り消すことが可能な状況が規定されている。
- また、ダミーに対する「意図と異なる名指し」は本条C項4(b)を適用し取り消すことが可能なことがある。
- L45C4(b) ○ ダミーに対する「意図と異なる名指し」はディクレアラー側のハンドから次にプレイするまで訂正することができる。「意図と異なる」とは全く口が滑っただけで、不注意なものであってはならない。以下は不注意なケースである。
- (1) 相手からスモールが出るであろうと考えていたのに、ついダミーのAQに向かってQと言ったが実はKが出ていた。
 - (2) エスタブリッシュしたスートを取った後にプレイするつもりをカードを、つい先に指定してしまった。
- いずれも不注意ではあるが、そのカードを対象に名指ししているため、口が滑ったとは扱わない。 （続く）

第45条 プレイされたカード（続き）**C. プレイしたとみなされるカード（再掲）**

4. (a) プレイヤが名指したり、プレイするつもりで指定したカードはプレイされる（ただし、第47条参照）。
- (b) ディクレアララーは自分のハンドまたはダミーから次のカードをプレイするまでは、意図と異なるダミーからのカードの指定を直すことができる。指定の変更において、口が滑ったことによるものは認めることができるが、集中力が途切れたり行動を考え直したことによるものは認められない。指定を変更する前に対戦相手が順番通り合法的にカードをプレイしていた場合は、この対戦相手はこのプレイしたカードをハンドに戻し、別のカードを代わりにプレイすることができる（第47条D項および第16条C項1参照）。
5. メジャーかマイナーかに関わりなく、ペナルティカードはプレイしなければならないことがある（第50条参照）。

D. ダミーが指定されていないカードを取り上げたとき

1. ディクレアララーが名指していないカードをダミーがプレイした位置に置いた場合、次のトリックに双方の側がプレイする前に間違いが指摘されたときは、このカードをダミーに戻さなければならず、間違いの後、指摘が行われる前にディフェンダーがプレイしたカードはハンドに戻すことができる。ディクレアララーのRH Oがプレイを変えた場合、ディクレアララーはそのトリックにその後プレイしたカードをハンドに戻すことができる（第16条C項参照）。

（続く）

L45C4(b) （続き）

- ダミーへの名指したカードの訂正は、ディクレアララー側のハンドから次にプレイするまでである。条文が回りくどいのは、トリックをまたぐケースを想定しているからである。ダミーへの名指しがプレーの3番手のときは、次のトリックで先にダミーがプレイするかもしれない。
- 本条D項の「名指していないカードをダミーがプレイした位置に置いた場合」と訂正期限が違うので留意する。
- 2007年規則までであった「考える間を置かず」の条文は削除された。訂正期限内であれば「考える間」は関係ない。
- 名指したダミーのカードを訂正したときは、続いてプレイされていたディフェンダーのカードを取り消すことができる。第47条D項『対戦相手のプレイの変更への対応』、第16条C項『取り消したコールやプレイから得た情報』より、取り消したカードの情報はディフェンダーにとって正当な情報である。
- 取り消すことができるのはダミーに名指したカードである。自分で触ったダミーのカードは取り消すことができない。

L45C5 ○第50条『ペナルティカードの処置』

- L45D1** ○訂正期限が本条C項4(b)「意図と異なるダミーからのカードの指定」と訂正期限が違うことに留意する。さらに本条は「双方の側」までであることに留意する。ダミーが正しくプレイしたと思っているディクレアララーは、次のトリックのプレイを続ける、するとリード権のある場所が違ったりして事態に気がつくことがある。ディフェンダー側がまだプレイしていなければ訂正期限内である。

（続く）

第45条 プレイされたカード（続き）

2. ダミーが間違えて置いたカード（本条D項1参照）を変えるには遅すぎるときには、プレイはこのトリックもその後のトリックもカードの変更なしに普通に進められる。ダミーが間違えて置いたカードがトリックの1枚目のカードのときには、そのスートにフォローしなかったことはリボークになることもある（第64条A項、第64条B項7、第64条C項参照）。ダミーが間違えて置いたカードが進行中のトリックにプレイされて、ダミーが結果としてリボークしたときは、第64条B項3および第64条C項を適用する。

E. トリックにプレイされた5枚目のカード

1. ディフェンダーがトリックに対してプレイした5枚目のカードは、ディレクターがリードとみなして第53条または第56条を適用しない限り、第50条に従いペナルティカードになる。
2. ディクレアラーがトリックに対して、ハンドまたはダミーから5枚目のカードを出したときは、ディレクターがリードとみなして第55条を適用しない限り、このカードを調整なしでハンドに戻す。

F. ダミーがカードを指示した場合

ダミーのハンドが広げられた後は、ダミーはディクレアラーの指示なく（カードを揃える目的を除き）カードに触れたり、カードを指示してはならない。ダミーがこのような行動をした場合、直ちにディレクターを呼んで報告するようにする。プレイは続けて行う。プレイ終了時に、ダミーがディクレアラーにプレイを示唆し、ディフェンダーが示唆されたプレイにより損害を受けたとディレクターが判断した場合、調整スコアを与えるものとする。

G. トリックを伏せること

4人のプレイヤ全員がトリックにプレイするまでカードを伏せないようにする。

L45 (続き)

L45D2

○第64条A項 『自動的なトリック調整』

第64条B項3 ペナルティカードやダミーのカードをプレイしなかったことによるリボーク

第64条B項7 双方の側がリボークしたとき

第64条C項 『損害の補償』

○ディクレアラーはダミーに♠Aのリードを指示した。ダミーは間違えて♡Aをプレイしたとする。ディクレアラーは♡を持っていてもおそらく♠をプレイするだろう。次のトリックに「双方の側が」プレイするとダミーの♡Aが成立するため、ディクレアラーの♠はリボークになる。そしてそのリボークは成立しているため訂正できない。

L45E

○「5枚目のカード」を順番外のリードとして扱うときは、まずリードの意図を確認する。意図がなければ「5枚目のカード」である。ただし以下のようなケースでは順番外のリードの可能性を考慮する。

- (1) スートにフォローしていないとき
- (2) 現行のトリックでのリーダーでないとき
- (3) 現行のトリックに勝ったと勘違いしている可能性があるとき（例えばAをリードしてラフされたことに気がついていないなど）

(続く)

第45条 プレイされたカード（再掲）

2. ダミーが間違えて置いたカード（本条D項1参照）を変えるには遅すぎるときには、プレイはこのトリックもその後のトリックもカードの変更なしに普通に進められる。ダミーが間違えて置いたカードがトリックの1枚目のカードのときには、そのスートにフォローしなかったことはリボークになることもある（第64条A項、第64条B項7、第64条C項参照）。ダミーが間違えて置いたカードが進行中のトリックにプレイされて、ダミーが結果としてリボークしたときは、第64条B項3および第64条C項を適用する。

E. トリックにプレイされた5枚目のカード

1. ディフェンダーがトリックに対してプレイした5枚目のカードは、ディレクターがリードとみなして第53条または第56条を適用しない限り、第50条に従いペナルティカードになる。
2. ディクレアララーがトリックに対して、ハンドまたはダミーから5枚目のカードを出したときは、ディレクターがリードとみなして第55条を適用しない限り、このカードを調整なしでハンドに戻す。

F. ダミーがカードを指示した場合

ダミーのハンドが広げられた後は、ダミーはディクレアララーの指示なく（カードを揃える目的を除き）カードに触れたり、カードを指示してはならない。ダミーがこのような行動をした場合、直ちにディレクターを呼んで報告するようにする。プレイは続けて行う。プレイ終了時に、ダミーがディクレアララーにプレイを示唆し、ディフェンダーが示唆されたプレイにより損害を受けたとディレクターが判断した場合、調整スコアを与えるものとする。

G. トリックを伏せること

4人のプレイヤ全員がトリックにプレイするまでカードを伏せないようにする。

L45E (続き)

L45E1,2 ○ディレクターが「5枚目のカード」として扱ったとき：

- ディクレアララー：ハンドに戻し特に調整はない
- ディフェンダー：メジャーペナルティカードになり

第50条『ペナルティカードの処置』を適用する

○ディレクターが「5枚目のカード」として扱わないとき、すなわち「順番外のリード」として扱ったとき：

- ディクレアララー：第55条『ディクレアララーの順番外のリード』を適用し、どちらのディフェンダーも「順番外のリードを」受け入れることも受け入れないこともできる。

- ディフェンダー：第53条『順番外のリードの受け入れ』および第56条『ディフェンダーの順番外のリード』を適用する。

L45F

○ダミーがプレイを示唆したとディレクターがみなしたときプレイは続行させる。ディフェンダーに損害があったと判断したなら調整する。さらに第90条『手順上のペナルティ』を科してもよい。

○ダミーが示唆したプレイが、普通にプレイであるなら調整はない。ただし第90条『手順上のペナルティ』は科してもよい。

(WBF Laws Committee 2008/10/10)

第46条 ダミーのカードの不完全または無効な指定**A. ダミーのカードを指定する正しい形式**

ディクレアララーはダミーからプレイするカードを指定するとき、希望するカードのスートとランクの両方をはっきり告げるようにする。

B. 不完全、または無効な指定

ダミーからプレイするカードを不完全または無効な指定をした場合、次の制限を適用する（ディクレアララーの意図について、疑問の余地がない場合を除く）。

1. (a) ディクレアララーがダミーからプレイするとき、「高い」、またはこれと同じ意味の言葉で指定したとき、リードされたスートの一番高いカードを指定したとみなす。
- (b) ディクレアララーがトリックに「勝つ」ようダミーに指定したとき、トリックを勝つことがわかっている一番低いカードを指定したとみなす。
- (c) ディクレアララーが「低い」、またはこれと同じ意味の言葉で指定した場合、リードされたスートの一番低いカードを指定したとみなす。
2. ディクレアララーがスートだけでランクを指定しなかった場合、そのスートの一番低いカードを指定したとみなす。
3. ランクだけでスートを指定しなかった場合、
 - (a) ダミーからのリードで、指定したランクのカードがダミーにあり、ダミーがそのカードのスートで直前のトリックを勝っているときは、同じスートを続けるとみなす。
 - (b) 上記の(a)以外で、指定したランクのカードがダミーにあるときは、それが合法的に出せるならばプレイしなければならない。ただし、指定したランクのカードで合法的に出せるカードが2枚以上あるときには、どれが意図するカードかをディクレアララーは指定しなければならない。

(続く)

4. ダミーにないカードを指定した場合、指定は無効になり、任意の合法的なカードを指定できる。
5. スートもランクも指定せず（「何でもよい」、またはこれと同じような意味の言葉で）プレイを指定した場合、どちらのディフェンダーもダミーからのプレイを指定できる。

- L46B** ○ディクレアララーの意図が明らかなきは、不完全な指定であっても、意図の通りプレイを認めてかまわない。「疑問の余地」についてディレクターは注意深く調査するべきである。それまでのプレイの流れは重大な情報になる。
- L46B5** ○第10条C項2よりディフェンダーは相談してはならない。
- L46** ○「♣を走って下さい」というのは先のトリックにおよぶ不適切な指示である。現行のトリックで♣の指定は取り消さない。次のトリック以降ではダミーの左手のディフェンダーがプレイしていなければ♣の指定を取り消すことができる。

(WBF Laws Committee 2000/1/12)

- ダミーに♣K J 6があつたとする。ハンドは♠4と♣7 3。4♠のプレイで、すでに8トリック取っていたとする。♣A Qはまだプレイされていない。ディクレアララーはハンドから♣3をリードし、ダミーに向かって「どっちかわからん、好きにしてください」と言った。本条B項5を適用すればディフェンダーは♣6のプレイを指定できるが、それは合理的な裁定ではない。♣K Jのどちらかをプレイする意図は明らかなのでディフェンダーは♣K Jのどちらかのプレイを指定する。もちろんこのようなディクレアララーの発言は馬鹿げている。

(Commentary to the 2007 edition of the Laws of Duplicate Bridgeより)

第47条 カードのプレイの取り消し**A. 調整の過程**

一旦行われたカードのプレイであっても、違反行為の後調整が必要なときは取り消すことができる（ただし、ディフェンダーの取り消されたカードはペナルティカードになることがある。第49条参照）。

B. 違法なプレイの訂正

違法なプレイを訂正するため、カードのプレイを取り消すことができる（ディフェンダーの場合は、本条で定められている場合を除き、第49条を参照）。同時に行われたプレイについては第58条参照。

C. 意図と異なる指定の変更

第45条C項4(b)で認められている指定の変更の後は、カードのプレイを取り消して調整なしでハンドに戻すことができる。

D. 対戦相手のプレイの変更への対応

対戦相手のプレイの変更の後、カードのプレイを取り消して調整なしでハンドに戻し、別のカードに取り換えることができる（第16条C項および第62条C項2を適用することがある）。

E. 間違った情報に基づくプレイの変更

1. 対戦相手がリードまたはプレイの順番であるとプレイヤに間違っ
て教えた場合、順番外のリード（またはカードのプレイ）は調整
なしで取り消す（第16条C項参照）。このような状況ではLHO
はリードまたはプレイを受け入れることはできない、また第6
3条A項1は適用しない。

（続く）

- L47A ○第49条『ディフェンダーが見せたカード』
○本条B項以下で具体的なケースが列挙されている。
- L47B ○第58条『同時に行われたリードまたはプレイ』
○第53条A項、ディクレアラ側側の順番外のプレイが受け
入れられなかったときに該当する。
- L47C ○第45条C項4(b)「意図と異なる指定の取り消し」
- L47D ○第16条C項『取り消したコールやプレイから得た情報』
○第62条C項2「リボーク後にプレイされたカードの取り
消し」
○原則として対戦相手のプレイの変更に伴うプレイの取り消
しには調整がない。つまりペナルティカードにならない。
例：第45条C項4(b)より、ダミーに指定したカードを
取り消したとき、ディフェンダーは調整なしでプレイ
を取り消せる。
ただし、リボークの反則者側はメジャーペナルティカード
になる。
- L47E1 ○プレイする順番を間違っ
て教えたときは、プレイを取り消
す。順番外のプレイのLHO（順番を間違っ
て教えた側）は順番外のプレイを受け入れることはできない。第16条
C項より下記のとおり扱う
・間違っ
て教えた側 反則者
・順番外のプレイをした側 非反則者
○第63条A項1「リボークの成立」。リボークがあり次の
トリックに反則者側がプレイしたが、そのプレイが対戦相
手からの間違っ
た順番を教わったためであるときについて
記述されている。通常の順番外のプレイは次のトリックに
プレイしたことになるが、この場合は順番外のプレイが取
り消されたうえ、第63条A項1を適用しないでリボーク
を訂正する。

第47条 カードのプレイの取り消し（続き）**E. 間違った情報に基づくプレイの変更**

2. (a) 対戦相手のコールやプレイの説明の間違いのため、説明が訂正される前に行ったカードのプレイは調整なしで取り消すことができるが、その後カードがプレイされていない場合に限る（第16条C項参照）。オープニングリードはダミーがカードを1枚でも表向きにされた後は取り消してはならない。
- (b) 本条E項2(a)に従ってプレイを訂正するには遅過ぎるときは、ディレクターは調整スコアを与えることができる。

F. その他の取り消し

1. 第53条B項の規定に従い、カードのプレイを取り消すことができる。
2. 本条が定める場合を除き、一旦行われたカードのプレイは取り消すことはできない。

- L47F ○本条に定められていないプレイは取り消すことができない。プレイヤが勝手にカードをハンドに戻し違うカードをプレイしたとき
- (1) 取り消す前のカードを成立させる。
ディフェンダーなら新しく出したカードはメジャーペナルティカードになる。
 - (2) リボークや規則の要求などにより最初のカードがプレイできないときは、該当する規則に従う。ディフェンダーなら取り消したカードはメジャーペナルティカードになるだろう。
- L47 ○取り消されたカードは非反則者側にとって正当な情報である。
- 取り消されたカードは反則者側にとって不当な情報である。反則者側は情報が明らかに示唆する選択肢を選んではならない。
- 非反則者側が取り消したカードにより損害を被ったと判断したときは第16条C項により調整する。
- プレイが進んでしまっても修正できないときは、第12条A項2を適用し調整する（87年規則の注釈より）。

第48条 ディクレアラールが見せたカード**A. ディクレアラールがカードを見せた場合**

ディクレアラールはカードを見せても制限を受けることはなく（ただし、第45条C項2参照）、ディクレアラールやダミーのカードがペナルティカードになることは決してない。ディクレアラールには偶然落としたカードをプレイする義務はない。

B. ディクレアラールがハンドを広げた場合

1. 順番外のオープニングリードの後ディクレアラールがハンドを広げたときは、第54条を適用する。
2. 順番外のオープニングリードのすぐ後を除き、ディクレアラールがハンドを広げたときは、トリックの「取り」または「取られ」の宣言をしたとみなし（ただし、取りの宣言をする意図がないことが明らかな場合を除く）、第68条を適用する。

第49条 ディフェンダーが見せたカード

普通にプレイしているときや規則を適用する場合を除き（例えば第47条E項参照）、ディフェンダーのカードがパートナーがカードの表を見ることができる位置にあったときや、ディフェンダーがハンドにあるカードを名指したときは、このようなカードはすべてペナルティカードになる（第50条参照）。ただし、ディフェンダーが現に進行中の完了していないトリックについて言及したときは第68条を参照し、またディフェンダーの「取られの宣言」にパートナーが反対したときは第68条B項2を参照する。

- L48A ○「ディクレアラールやダミーのカードがペナルティカードになることは決してない。」
○第45条C項2「ディクレアラールのプレイされたとみなされるカード」
○偶然落としたカードはプレイする義務はないが、ディクレアラールの不注意なプレイを救済するためではないことに注意して状況を判断する。
- L48B1 ○第54条『表向きに出した順番外のオープニングリード』ディクレアラールが、故意に見せたか、間違って見せたかは関知しない（87年規則の注釈より）。
- L48B2 ○第68条『トリックの「取り」または「取られ」の宣言』ディレクターは特に反証がない限りトリックの「取り」または「取られ」の宣言をしたとみなす。
- L49 ○第47条E項『間違った情報に基づくプレイの変更』
○第50条『ペナルティカードの処置』
○第68条B項2「ディフェンダーの取られの宣言にパートナーが反対したとき」
○外的要因によってカードが見えてしまったときはプレイヤに責任を問うべきではない。プレイヤに過失がないことに十分納得すれば双方を非反則者として扱う。第12条により調整しアベレージ++になることもありうる。

第65条 トリックの並べ方**A. 完了したトリック**

トリックに4枚のカードがプレイされたときは、各プレイヤは自分のカードをテーブルの上の自分の近くに伏せる。

B. トリックの勝ち負けの確認

1. 自分の側がトリックを取った場合、カードを縦向きに置く。
2. 対戦相手側がトリックを取った場合、カードを横向きに置く。
3. プレイヤは間違った向きに置かれたカードを指摘することができるが、自分の側が次のトリックのリードまたはプレイをするとこの権利はなくなる。これより後、指摘をしたときには第16条B項を適用することがある。

C. 整頓

正しく1列に重ねて並べ、プレイ完了後、双方が取ったトリックの数やカードをプレイした順番の確認が必要なときのため、調べ直しできるようにする。

D. プレイの結果についての合意

プレイヤは取ったトリックの数を合意するまで、プレイしたカードの順序を乱さないようにする。本条の規定に従わないプレイヤは、トリックの勝ち負けの主張や、リボークの主張（あるいは否定）が受け入れられにくくなる。

- L65B**
- 間違った向きにトリックを伏せたカードに対して指摘する権利は2017年規則で期限が変更された。
 - 第16条B項『パートナーから得た余計な情報』
 - 旧規則ではディクレアラーはいつでも誰にでも指摘することができた。新規則で違反したとしても余計な情報の影響はないはずである。規則が変更されたことを説明する対応が適切である。
- L65D**
- プレイしたカードの順番を乱すと、プレイを再現してトリック数の確認をしたり、リボークの主張が行われるときに証言の信頼度が少なくなる。ただし権利がなくなるわけではない。

第66条 トリックの検査**A. 現行のトリック**

ディクレアラーとディフェンダーは自分の側が次のトリックにまだリードまたはプレイしていない限り、自分のカードをテーブル上に伏せるまでは、現行のトリックにプレイしたカードを全部表向きにするよう要求できる。

B. 自分の最後のカード

自分の側が次のトリックにリードまたはプレイするまで、ディクレアラーとディフェンダーは、自分が最後にプレイしたカードを調べることができるが、見せてはならない。

C. 終了したトリック

この後は、プレイが終了するまで、終了したトリックを検査してはならない（ただし、リボークの主張を確認するために必要な場合など、ディレクターが特に指示した場合を除く）。

D. プレイ終了後

プレイ終了後は、リボークやトリックの勝ち負けの数の主張について解決するため、プレイしたカードとプレイしていないカードを検査できる。ただし、自分以外のカードに触れないようにする。このような主張があったがディレクターには事実の確認ができず、かつ一方の側だけがカードを混ぜている場合は、もう一方の側に有利な裁定をするものとする。

- L66B ○プレイヤは自分の最後のトリックを調べることができるが、他のプレイヤに見せてはいけない。
○ダミーは最後にプレイしたカードを調べることはできない。
- L66C ○第6 1条C項『トリックを調べる権利』にあるとおり、リボークの指摘があったとしてもプレイヤには終了したトリックを検査する権利はない。
○ディレクターはむやみに「トリックを検査する権利を」行使すべきではない、リボークの成立が明らかなきに「トリックの検査」は必要ない。プレイ終了後に確認すれば問題ない。
○リボークが成立していないときや成立に疑問があるときに「トリックの検査」を行う。そのときも他のプレイヤに見えないよう留意する。
- L66D ○第6 5条D項『プレイの結果についての合意』と同様、プレイしたカードの順番を乱すと、プレイを再現してトリック数の確認をしたり、リボークの主張が行われるときに証言の信頼度が少なくなる。ただし権利がなくなるわけではない。
○確認にあたってディレクターは、プレイヤに自分のハンド以外のカードへ触れさせてはならない。これはハンドが入れ替わらないようにするため、非常に重要である。

第67条 過不足のあるトリック**A. 双方が次のトリックにプレイする前**

トリックにプレイしなかったり、2枚以上のカードをプレイしたときに、双方が次のトリックにプレイする前に違反行為が指摘された場合は、過不足を調整しなければならない。

1. トリックにプレイしなかったときは、これを修正するため、反則者は合法的に出せるカードをプレイする。
2. トリックに2枚以上のカードを出したときは、このプレイを修正するため第45条E項(トリックにプレイされた5枚目のカード)か、第58条B項(ハンドから同時にプレイした複数のカード)を適用するものとする。

B. 双方が次のトリックにプレイした後

双方が次のトリックにプレイした後、(プレイヤのハンドのカードが多過ぎたり、少な過ぎたりし、プレイしたカードの数がこれに一致して過不足があるという事実から)、トリックに過不足があることをディレクターが確認したときは、次の手順をとる：

1. 反則者が過不足のあるトリックにカードをプレイしなかったときは、直ちに次のとおりカードを1枚表向きにさせ、反則者のプレイ済みのカードの中に置くよう指示する(このカードは過不足が起こったトリックの勝ち負けに影響しない)。
 - (a) 反則者が過不足のあるトリックにリードされたスートのカードを持っている場合、その中から1枚を選び、自分のプレイ済みのカードの中に置く。この反則者は過不足のあるトリックでリボークしたものとみなされ、第64条A項2に従って1トリック移行させる損失の対象となる。
 - (b) 反則者に過不足のあるトリックにリードされたスートのカードがないときは、任意のカードを選んで自分のプレイ済みのカードの中に置く。反則者は過不足のあるトリックでリボークしたものとみなされ、第64条A項2に従って1トリック移行させる損失の対象となる。

(続く)

L67A ○双方の側が次のトリックにプレイしていないときは、過不足のあるトリックは修正しなければならない。

L67B ○あるトリックにカードをプレイしないで、双方が次のトリックにプレイするとリボークしたものとみなされる。スートフォローするカードを持っていなかったとしても、リボークとして扱わなければならない。

○新たに置かれたカードは勝ち負けに関係がないので、第64条A項2「反則したプレイヤがりボークの起きたトリックを取らなかったとき」を適用する、その後反則側がトリックを取っていれば、自動的なトリック調整は1トリックになる。

○あるトリックに2枚のカードを重ねてプレイしていたとき、プレイされなかったカードは一貫してハンドにあったものとして扱われる。スートフォローの機会にフォローしていなければリボークになる。

第67条 過不足のあるトリック（続き）

2. (a) 反則者が過不足のあるトリックに2枚以上のカードをプレイしたときは、ディレクターはプレイしたカードを検査し、そのトリックに表向きにプレイ済みのカード以外のカードを全部反則者のハンドに戻すよう指示^{*20}する（どのカードを表向きにしたか確認できない場合、反則者は過不足のあるトリックに合法的にプレイできたカードの一番高いランクのカードを残す）。過不足のあるトリックの勝ち負けは変わらない。
- (b) 戻したカードは一貫して反則者のハンドにあったとみなし、このカードを以前のトリックでプレイしなかったことはリボークになることがある。
3. ディレクターが、反則者は該当トリックにカードをプレイしたものの、そのカードをプレイ済みのカードの中に置かなかったことを確認した場合は、そのカードを探し出して反則者のプレイしたカードの中に置く。さらにディレクターは、同じカードが該当トリック以降にもプレイされ、この違法なプレイを訂正するには遅過ぎるときには、調整スコアを与えるものとする。

^{*20}ディレクターは極力ディフェンダーのプレイしたカードが見えないようにするが、ディフェンダーのハンドに戻すカードが見えたときは、ペナルティカードになる（第50条参照）。

- L67B3 ○2017年規則の新項目である。プレイヤがプレイのしたカードをプレイ済みの列に置かず、もう一度別のトリックでプレイしてしまったケースについて規定されている。
- 同じカードの2回目のプレイを「訂正するには遅すぎる」かどうかは、ディレクターが判断する。
- 判断基準の一つは次のトリックに双方の側がプレイしていたかどうかであるが、ディレクターの判断が優先される。
- (WBF Laws Committee 2017/8/15)

プレイされたカードの裁定

第45条『プレイされたカード』は重要な条項である。

- ・適切に状況を聞き取る技術
- ・プレイヤに規則を説明する技術

が求められる。ディレクターが判断する要点がプレイヤに理解されず前には違う裁定をされたと不満に思われることがある。プレイヤの「前は違う裁定をされた」「他のディレクターは違う裁定をした」という意見に流されてはいけない。ディレクターとして規則に基づいて裁定していることに自信が持てる一助となればと思う。

裁定の原則

- ・ディクレアララーはちょっと見えたぐらいではプレイしたことにならない
- ・ディフェンダーは見せたカード＝プレイしたとみなされるカード
- ・落としたカードはプレイしたカードではない
- ・不注意な（注意力が途切れた）名指しは取り消せない

実際の裁定例

※状況はあくまで一例である。内容が伝わることが重要である。一例であることを考慮してプレイヤに合わせて工夫すること。

○プレイ中のテーブルでディレクターが呼ばれた。

○ディクレアララー「Eが出したカードを引っ込めたんです。」

○ダミー「そうです、♠9が私には見えませんでした。」

※ディレクターはダミーの積極的な参加を制止すべきである。このように具体的な発言を許すべきではないが、発言されてしまった以上先を続ける。

○ディレクター「わかりました、状況を確認しますので質問された方が答えて下さい。勝手な発言は裁定に影響する可能性がありますので控えて下さい。」

○ディレクター「(ディクレアララーに向かって) 状況はEの方が一度出したカードをハンドに戻したということでしょうか?」

○ディクレアララー「そうですカードも見えたんです。」

○ダミー「♠9です。」

○E「机に置く前にすぐに戻したんです。」

※できる限り質問されていないダミーが勝手に回答するのを制止するよう試みるが、今回はだめだったとしよう。

○ディレクター「重ねて言います、一人ずつ聴きますので勝手に発言しないように。特にダミーの方は積極的な発言を控えて下さい。」

○ディレクター「(Wに向かって) カードはどのくらいまで出しましたか?」ダミーからカードを1枚拝借してジェスチャーする。「この辺までですか?」(体のごく手前でテーブルと垂直に持ちカードを戻す仕草をする)「それともこの辺まででしょうか?」(テーブルの近くでカードを水平に持ち戻す仕草をする)

※ダミーが勝手に発言しないよう気を配りながらWの意見を聞く。実際にプレイしたEから意見を聞くとWがその発言に引っ張られる可能性があるので最初にWに状況確認する。

○W「ハンドを見ていてよく見ていなかったんです」

○ディレクター「(Eに向かって) カードはどのくらいまで出しましたか?」ジェスチャーを繰り返して「この辺までですか?」「それともこの辺まででしょうか?」

※ダミーが勝手に発言しないよう気を配りながらEの意見を聞く。

○E「この辺です。テーブルには付いてません。」

※Eがハンドのカードを持って実演しようとしたときは、なんとしても止める。ここでカードが見えてしまったら元も子もない。

○Eの行動をディレクターが再演し、「このくらいですか?」

○E「そうです」

○ディレクター「ディクレアララーの方はどうですか?」

○ディクレアララー「とにかくカードが見えたので、その程度は出てました。」

○ディレクター「ダミーの方はどうですか？」

○ダミー「机には付いてませんがはっきり見えたんです。」

ディレクターは出されたカードがWに見えるような位置まで出たかどうかを判断する。Wに実際に見えていたなら当然プレイされたカードである。そうでない場合、実際に見ていないかどうかについては関係ない。

ディクレアラ側にはカードが見えたことは状況証拠のひとつになるのでプレイされたカードとしてディクレアラが判断することに異存はない。ただし注意深く状況確認するとディクレアラの両側がカードを見ていたとしてもWがカードが見えるような位置には達していないと確信できるときもある。今回はプレイされていないとディレクターが確信したときの裁定を記述する。

※例えばカードが垂直に持たれパートナーの目線より高い位置で戻されたことが確認できたとする。カードを出す角度でディクレアラとダミー双方にカードが見えることがある。カードは通常ハンドから角度をつけて引き出される、ディクレアラとダミーがカードを見たタイミングが違えば十分にあり得る状況である。

○ディレクター「まず最初に状況を確認します。Eがカードをハンドから出し、ディクレアラ側にはそれが見えた。実際出したカードがどの当たりでどの角度かについてはおおよそこの程度だった。」

※ディレクターが実演して全員の確認を取るこの行程が最も重要である。確認が取れないときにディレクターが確信することはないだろう。

○ディレクター「ブリッジの規則では、パートナーが見えるような位置に持たれたカードがプレイされたカードとして定められています。」

○ディレクター「つまりパートナーが見ることができなかった位置なら、ハンドからカードを出してもプレイされたことにはなりません。」

○ディレクター「いま確認したところ出すときに角度が付いてディクレアラ側にはカードが見えたようですが、その位置ですとパートナーからはまだカードが見えないと判断しました。」

※手振りを加えディクレアラ側には実際見えないことを納得させる。

○ディレクター「Eはカードをハンドに戻し、改めて好きなカードをプレイして下さい。ダミーの発言による見えたカードの情報はWにとって正当な情報です。Eが自分で見せたカードですからディクレアラにとっても正当な情報です。」

※厳密に言うとはディレクターはディクレアラが見たカードを確認していない。ディクレアラはスーツくらいまでわかっている、ランクまでわからないことは往々にある。そのときダミーの発言でカードが特定されたと判断したならば、ディクレアラにとってカードのランクは不当な情報である。今回はディレクターがディクレアラにもカードが見えていたと判断したケースになる。

※このようなときにディフェンダーがカードを見せてしまったり、名指してしまうことがある。名指してしまうとカードを見せたこととして扱われる。さらにディフェンダーの見せたカードなのでメジャーペナルティカードになり、結局そのときはプレイしてもらうことになる。

最後にもう一度、ディレクターがディフェンダーのパートナーに見えていないと確信したときの裁定である。ディクレアラ側にはカードが見えたことは、パートナーにもカードが見えた位置にあったかもしれない有力な証言であることに変わりはない。